



栃 木 市

教育委員会だより



発行：栃木市教育委員会

住所：栃木市万町 9-25

電話：0282-21-2467

FAX：0282-21-2689

Email: kyoumu@city.tochigi.lg.jp

「郷土料理」



郷土料理「しもつかれ」

十数年前、栃木市を終の棲家にしようと考えていた頃、知人から栃木を代表する郷土料理の「しもつかれ」と「モロステーキ」でもてなしたいという誘いを受けた。ワクワク感を抱えて家を訪れた。ところが、思い込んでいたカレーやステーキとは程遠く、今まで味わったことのない舌触りと味と素朴な色等々、思い込みの怖さを自省した。その後、好奇心に駆られて、郷土料理について書物で調べたり、ご高齢の方に聞いたり、研修会にも参加したりした。お陰で「しもつかれ」や「モロ(サメの肉)」の食文化が分かるようになった。

「しもつかれ」は、二月初午の日に、稲荷神社に供える行事食で、厄除けにご利益がある縁起の良い家庭料理として知られている。さらに、海をもたない栃木県ではサメ肉のザガンボは、低脂肪・低カロリー・高タンパク質と栄養面でも優れた魚で、煮たり焼いたり蒸したりして食べている。結婚式や葬式では欠かせない食事となっている。どちらも手間と知恵と愛情が凝縮した地域固有の料理であり、冬季に食卓に上がる機会が多い日常食である。名前の由来には諸説あるようだ。「しもつかれ」を作る際に竹製の目の粗い「鬼おろし器」は欠かせない道具だ。粗く削ることで、食材の風味を残すことができるという。鮭の頭・大豆・野菜・油揚げなど身近な食材を煮込み、酒粕を加えて仕上げた料理だ。調味料や添加物は一切使用せず、食べ方も地域によって、温めたり、雪の中で冷やして食べたりと多様だ。それぞれの家に昔から受け継がれてきた作り方があり、味も違う。二月は、寒さが最も厳しく食糧が一番乏しくなる時期。そんな時、先人の知恵によって創り出されたのが「しもつかれ」であり、モロを使った料理である。これらの郷土料理には個性と文化がある一方、地域の風土に合わせた調理法・食材を無駄なく活用することで食品ロスはゼロ・そして皆で食べ合う等々の共通点もある。幼少の頃、最上川の河川敷で遊び疲れた仲間と一緒に作って食べた「芋煮汁」を思い出す。学校給食にも、郷土料理が提供されている。

「食事」は“人に良い事”と書く。人間形成を図る上で食事は様々なことを学ぶ貴重な場である。そこで、食材の命に感謝の気持ちを込めて、「(命を)いただきます!」の本来の意味を確認しつつ、地域で根付いている郷土料理を発掘し、次への世代につなげていくことで、本市への愛着度がさらに強くなることを期待したい。

教育長職務代理者 後藤 正人

栃木市教育のスローガン

「ふるさとの風土で育む 人づくり・まちづくり」

～とちぎ未来アシストネットの推進～

‘とちぎ未来アシストネット’とは、学校・家庭・地域の連携により、地域ぐるみで子どもたちの「生きる力」を育むとともに「地域の活性化」を図る本市独自の教育システムです。



栃木市教育ニュース

栃木市教育委員会では、生涯学習を基盤とした社会の構築を目指して、本市ならではの教育を推進しています。今号の『栃木市教育ニュース』では、現在市内全ての公立小中学校で行われている学校支援ボランティア活動や子どもたちの地域貢献活動を進める「とちぎ未来アシストネット事業」を紹介します。

とちぎ未来アシストネットにおける実践事例

地域の方と調理実習



児童・生徒が学校で学んだことをもとに、地域に出て活動することも活発になってきています。子どもたちは活動によって自信がつき、地域のよさを再確認することができました。地域にとってもお祭りやクリーン活動等に子どもたちが参加することにより、活動が活性化し、世代間の交流が生まれています。

コロナ禍での消毒作業



学校支援ボランティアの方々は、自分の知識や特技を生かし、児童・生徒たちのために活動をされています。学校支援活動に対して、先生方からは「学校の教育活動が充実した」「子どもたちの学習に対する意欲が向上した」という声が寄せられるなど、地域の方々のサポートにより、教育活動の充実が図られています。

太平山での観光ボランティア



新型コロナウイルス感染症の影響により、多人数で集まることが制限され、ボランティアを例年通り行うことができない状況です。しかし、「コロナ禍だからこそ」と消毒作業やマスクづくり、授業に使用する動画の制作など新たな活動に取り組んでいます。その活動の中で新たな仲間ができたという声もあり、地域の絆がより深まっています。

「夫のトリセツ」等の著書で有名な栃木市出身のAI研究者、黒川伊保子氏の講演（家庭教育講演会）を聞き、「人工知能も人間も入力しなければ出力しない」の言葉が頭に残った。この世に生を受けた瞬間から、人は縁ある人々にたくさんの事柄を入力してもらって個人がつくられ、やがて他人と共感し共に生きることができるようになる。「みんなで育てる」という栃木市が誇る未来アシストネット事業は、人々が何百年と繰り返してきた子育てを今も確実に伝えている証である。

教育委員 福島 鉄典

令和2年度

とちぎ未来アシストネット実績

学校支援ボランティア活動

☆ 延べ回数 5,945回

☆ 延べ人数 356,950人





教育委員の活動日誌

教育委員は、本市の教育の充実のため、毎月の定例教育委員会をはじめ、様々な活動に積極的に取り組んでいます。今号の『教育委員の活動日誌』では、その一部を紹介するとともに、教育委員がおすすめする事業をPRします。



定例教育委員会

毎月開催している教育委員会の会議です。本市の教育に関する様々な事務について、事務局職員からの説明を聞いたうえで、7名の委員が活発に協議を重ね、実施の決定等審議を行っています。



栃木市の教育

私の一押し事業!

～教育委員から～

市民の皆様ぜひ知っていただきたい
事業をPRします!

生涯学習のすすめ

栃木市では、大人から子どもまでの多くの市民の方が、「いつでもどこでも楽しく学べる生涯学習」が行えるようにその機会を多く設けています。市内の文化会館や図書館、公民館等の社会教育施設で随時開催をしていますが、その内容は市民のニーズや社会の要請に応じたバラエティ豊かなものになっています。例えば歴史、社会見学、健康で長生きの秘訣、料理、ダンス、コーラス、体操、ウォーキングなど盛沢山です。コロナウイルス感染症のため、止むを得ず中止された講座もありますが、皆様もぜひ自分に合った講座を探して受講してみたいかがでしょうか？ 教育委員 西脇 はるみ

GIGAスクール

二学期からの本格運用に向けて、小中学校での一人一台端末の整備が急速に進みました。リモートが当たり前になった今、いち早く端末に慣れることは必要不可欠な学びの一つです。今までにない新しい学習のスタイルにより、授業では、子ども達の意欲の向上や学力の定着、個人の発達の差を補ってくれるような活用ができると考えます。この教育の導入により、誰かの未来が大きく明るい方になることになるかも!!と心から期待をしています。

教育委員 大橋 孝子

家庭教育オピニオンリーダー

私の一押しは、家庭教育オピニオンリーダーです。栃木市内には6つの団体(CARPA・ほほえみの会・かるがも岩舟・どーなつクラブ・こーらす・らっこくクラブ)があり、それぞれの地域で「子育ての不安や悩みをどうすればいいの?」なんて思っているママ達に、子育てサロンや交流事業を提供し、「子育ては孤独なものではないんだよ。子育ては楽しいよと思ってくれることを願い」行われています。育児という重圧を一人で抱え込まず、一度足を運んでみてください。共有できる仲間や先輩との出会いが待っています♡

教育委員 舘野 知美



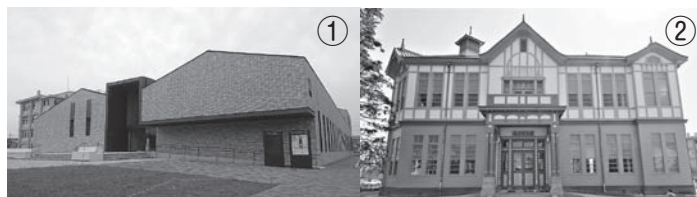
栃木市立美術館と文学館が竣工 来年度中の開館に向けた準備が進んでいます



栃木市立美術館(写真①)は、入舟町の旧市役所跡地に新築された、市内外の優れた作品等を最適な状態で鑑賞・保存できる、本市初の本格的な美術館です。

栃木市立文学館(写真②)は、旧市役所別館を100年前の建築当時の姿に復原して整備した、主に市ゆかりの文学者たちについて知ることができる資料館です。

建物は2館とも3月に竣工し、現在、開館記念特別展の準備などを進めています。開館は、文学館が来年春、美術館が来年秋を予定していますので、ご期待ください。



歌麿が遊び、少年有りが口笛を吹いた蔵々並ぶ街並みに、新しいミュージアムが軒を並べます。中に入ると、秘蔵されてきた傑作たちが、「わかるかい、わかるかい」といって、令和人の行く手に立ちふさがらるんだそうです。

教育委員 林 慶仁

教育長通信 ～あなたも、わたしも“ジェンダーフリー ネイティブ”～

「男は黙って ○○ビール。」このフレーズに馴染みのある年配の向きは少なくないのではないのでしょうか。渋い役どころが定番の二枚目俳優(確か、三船敏郎さんだったかと…)が何も語らずビールを飲み干すシーンに続いて、このメッセージが文字だけバーンと画面に現れるというもの。かれこれ50年も前のことですが、斬新でインパクトのあるこのCMは一世を風靡し、都市伝説になりました。当時小学生であった自分にとっても、記憶に残るCMの一つでした。聞けば、どちらかというとき爽やかな味わいで女性的と言われていたこのビールのイメージから男性的なイメージへと転換を図ることで、男性市場の拡大をねらっていたとのこと。

ところで最近、「ジェンダーフリー」という言葉を耳にすることが多くなりました。そもそも「ジェンダー」とは、生物学的な男性・女性ではなく、社会通念や習慣などによって固定化された男性像や女性像といった、いわゆる社会的性別のことです。そのような社会的性別による社会構造や役割にとらわれずにいこう、というのが「ジェンダーフリー」の考え方ですが、実際世の中に目を向けると、性差による不平等感を禁じ得ない場面や、男性(または女性)はこうあるべき、といった固定観念に基づいた体制や言動がまだまだ散見される状況にあるようです。つい最近も、国の重要なポストを担う立場の方が、女性に対する偏見に満ちた発言により職を辞することになったというニュースが物議を醸したばかりです。こういった側面から見ると、残念ながら日本は諸外国からかなり遅れをとっていると言っても過言ではありません。

一方、学校現場に目を向けると、「ジェンダー」の壁は全くと言ってよいほど感じられません。学級や児童会、生徒会等の役割は性別に関係なく子どもたち1人1人の希望や意欲が尊重され、適材適所の観点で決まっています。一時代前ならたい男子の役割、と思われていた運動会の応援団長も、今やほぼ男女半々です。また、かつては男女別であった名簿は混合名簿となり、先生方が子どもたちを呼名する際も、「○○君」、「○○さん」ではなく、一様に「○○さん」を用いています。さらには、本県の次年度高校入学選抜試験の願書から「性別欄」が廃止となったり、全国的な傾向として、女子生徒もスカートからスラックスかを選べる様な制服の自由選択制も徐々に広がりつつあります。

「男性だから」「女性だから」ではなく、「私だから」「あなただから」への発想の転換は、学校現場が最も進んでいるように思います。そして、このような環境で育まれている子どもたちは、よく言われるところの「デジタルネイティブ」や「ネット ネイティブ」ならぬ、正に「ジェンダー フリー ネイティブ」と言えるのではないのでしょうか。本市においても、男女協働参画社会の推進が強く求められる中、今後その鍵を握るであろう子どもたちに大いに期待をしたいものです。それにしても、そんな子どもたちが、先の「男は黙って…」のCMを見たらどんな反応を示すのかなと、ふと試してみたくなりました。

教育長 青木 千津子

【編集後記】

“教育委員会だより 絆” は市民の皆様にも、教育への関心を一層高めてもらうため、‘開かれた教育委員会’としての活動を「分かりやすく」「親しみやすく」紹介していきます。

※ご意見・ご感想は
こちらまでお寄せください。

栃木市教育委員会教育総務課 〒328-8686 栃木市万町9-25
電話:0282-21-2467 FAX:0282-21-2689 Email:kyoumu@city.tochigi.lg.jp